



「『序曲』としてのオノサト・トシノブと新井淳一」展示風景

## ことば 147

それは誰かの心の中の奥深くにある、夢であったり、幻想だったりするのかもしれませんが。そんな、目には見えないけれど確かに“そこにあるもの”を感じ取っていただけたらと願っています。

(寺村サチコ「桐生のアーティスト2025 KIRYU Fantasia－桐生幻想曲」コメント)

大川美術館では、2025年10月11日から12月14日の会期で、企画展「桐生のアーティスト2025 KIRYU Fantasia - 桐生幻想曲」を開催しました。本欄では、本展をご覧いただいた群馬県立館林美術館・定松晶子氏、高崎市美術館・柴田純江氏にそれぞれの視点からレビューのご執筆をお願いしました。また、大川美術館のコレクションによる展覧会を開催いただいた萬鉄五郎記念美術館・高橋峻氏にご寄稿をお願いしました。ここに改めて謝意を表します。

## 幻想の生きる街、桐生

定松 晶子

私にとって桐生は幻想的な街だ。住んでいる人からすると、どこが、と思われるかも知れない。単に私が桐生に住んだことがなく、よく知らないからこそ感じるミステリアスさと考えられることができるけれど、全ての知らない街に対してそう感じるわけではないから、きっと何か理由があるのだろう。考えて思いあたるのは、その過去や歴史が大きく影響しているのだろうということだ。桐生は江戸時代中期には織物の産地として栄え、豊かになり、独自の文化を築き上げた。そしてその土壌から稀有な人材を輩出し、他の土地から人々を引き寄せ、語り継がれる逸話や物語を生む。長い時の流れにより、今や街に関わるもの全ての記憶が澱のように積み重なっていて、そこから何かの拍子で現在に一瞬姿を見せる時、幻想が立ち上がる。元織物工場ののこぎり屋根に、和洋折衷の洋風建築やれんが造りの倉庫に、かつて誰かが暮らしていた家の古びてはいても瀟洒なたたずまいに。桐生には過去の記憶が姿をのぞかせる開口部がいたるところに点在している。

そんな訳で、今年の「桐生のアーティスト2025」のテーマ「夢と幻想」は、私には大川美術館で開催するのにごくふさわしいものを感じられた。この展覧会「桐生幻想曲」では、桐生出身や在住の6名の作家をとりあげ、それぞれの幻想的な作品を紹介している。そのうち、最初に会おうのは御子貝仁美のビーズを主体としたアクセサリーだ。ビーズはどこかアンティークな印象を与える素材である。例えば、祖母から彼女が若いころに使って

たビーズのアクセサリーを手渡された、というような。私にはそんな経験はないけれど、御子貝仁美の作品はそんな妄想まで起こさせる魅惑に満ちている。貝殻のパーツなども実際に使用されているが、ビーズの集積はまるで自然界で生まれた物のようにも見え、作品に特別な存在感を与えている。

次には、イラストレーター、デザイナーとして活躍するYU TANIMURAの、モノクロームの繊細な線描作品と、植物や森をイメージしたカラフルな作品を見ることができる。西洋や東洋のさまざまな源から引き出されたモチーフや装飾がびっしりと描き込まれ、またコラージュされた作品は、楽しくて、優しく、幻想というよりも、日常と隣り合わせのあたたかなファンタジーと言った方がぴったりくる。



御子貝仁美 展示風景



YU TANIMURA 展示風景

「桐生幻想曲」には女性作家が多いためか、女性をモチーフやテーマとした作品が見受けられた。その一人が福島万里子だ。福島絵の絵の中では、グラマラスでとびきりセクシーな女性たちが、魅惑的な笑みを見せ、気ままに振る舞い、その瞬間を謳歌している。作者が「自分の願望」と語ってもいるように、その姿は見ていて羨ましくなるほど爽快だ。もう一人はテキスタイル作家の寺村サチコである。寺村はシルクオーガンジー



福島万里子、竹内美絵 展示風景（右より各2点）

に絞りや染めといったテキスタイルの手法を用いて作品を制作し、女性や生命の美しさ、そして毒を表現している。本展では、階段の吹き抜け空間全体を使って作品が構成されている。階下に設置された白いオーガンジーの作品は、裾を広げたウエディングドレスを思わせ、否応なく女性的なものを意識させる。一方、そのロマンチックとも言える様子を見下ろしながら降りる階段で、見上げた作品の内側は、はっとするほど赤く毒々しい。女性たちの持つ多面性やアンビバレントさが、西洋の中世では魔女、19世紀末にはファム・ファタルという幻影を、男性たちに抱かせたのだろうか。

残る二人の作家にも共通点を見出せる。それは抽象的な造形が紡ぎ出す幻想だ。竹内美絵の絵は黒い画面に銀色の細い線で描かれている。これらの線はしなやかに曲がり、うねり、時には特定の形を繰り返し、寄り集まって、まるで生命を帯びたものがオーロラのように流動する闇の空間を作り出している。ヤマザキミノリも、闇に空間を創出する魔術師、と言いたくなる作家だ。点や線、ミラーといった構成要素の計算された配置に、光の力を加えることによって現れる果てしない空間は、魔術ではなく、人間の想像力とテクノロジーの賜物である。ヤマザキは桐生の思い出として、絶えず聞こえていた織

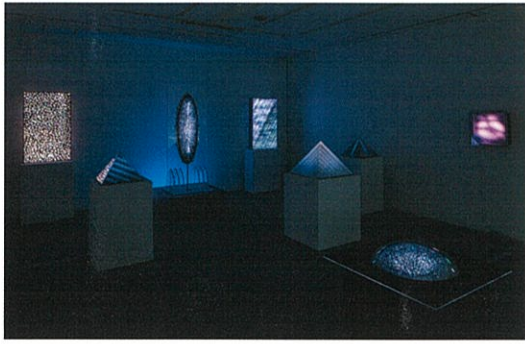
機の音や父親の工場を見ていたことを挙げている。そんな環境がアートとテクノロジーへの関心を育んだことは想像に難くない。

これからも桐生では日々、様々な記憶が重ねられていくことだろう。この街がアーティストを生み、アーティストを惹きつける、幻想の地であり続けてくれたらと願っている。

（群馬県立館林美術館 学芸員）



寺村サチコ 展示風景



ヤマザキミノリ 展示風景

「桐生のアーティスト2025 KIRYU Fantasia」に  
寄せて 一高崎ゆかりの画家、竹内美絵を中心に

柴田 純江

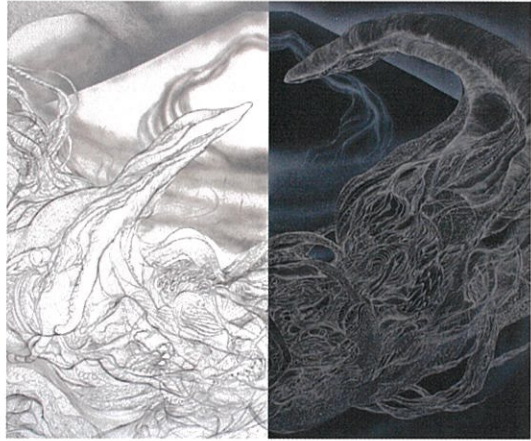
2020年から始まった大川美術館の「桐生のアーティスト」は、桐生に深いゆかりを持つ作家たちに焦点をあて、多彩な作品群を紹介してきた。本年の「桐生のアーティスト2025 KIRYU Fantasia 桐生幻想曲」では「夢と幻想」をテーマに6人の作家たちの作品が紹介されている。絵画の竹内美絵、福島万里子、テキスタイルの寺村サチコ、アクセサリーの御子貝仁美、インスタレーションのYU TANIMURA、ライトアートのヤマザキミノリと、ジャンルも多岐にわたる今回の展示では、閉塞感の漂う現代を生きながらも、心に抱く夢と幻想を表現する自由は決して手放さないと宣言するかのような、魅力あふれる空間が展開されていた。

本稿では、高崎市生まれで2024年に高崎市美術館において特集展示を行った画家、竹内美絵(1998-)を中心に紹介したい。現在、高崎を拠点に制作活動が続ける竹内だが、母の実家のある桐生は幼少期から深く親んできた地であり、大好きな八木節祭りでは櫓近くで踊りを楽しみ、桐生が岡遊園地や動物園にも足繁く通ったという。

絵画の制作においてきわめて早熟だった竹内は2014年、高校2年で異例の独立展入選を果たし、新聞記事で紹介されるなど大きな話題となった。その前年頃から開始した、アクリルで黒く塗りつぶした画面に銀ペンで無数の有機的な線を引くという手法により、竹内の作品世界に無二の個性がもたらされた結果だろう。竹内の言葉によれば、時に漆黒で時にグラデーションを見せる背景

の「黒」は、生命が生まれ出るところの「無」を象徴している。無から生まれ出て、連鎖しながら揺れ動く存在を、竹内は銀ペンのシャープな線で追いつけている。

今回の展示に出品されている2021年制作の《轟》では、山岳の形態を背景に、前景では不思議な生命体を思わせる黒白のモチーフが左右対をなし呼応し合う。流麗な線描がよりいっそう際立ち、竹内の新しい境地を感じさせる。この作品は、竹内が高崎市の榛名湖アーティスト・レジデンスに滞在中に制作された。日々、山と湖を眺めながら榛名の伝説にも思いを馳せて描いたという本作には神秘的な幻想があふれており、大自然が内に秘めるアニミズムとそれを畏怖する人々の営みを彷彿とさせる。



竹内美絵《轟》2021年 作家蔵



竹内美絵《生マレル時I》(左)、《生マレル時II》(右) 2025年 作家蔵

(写真提供：竹内美絵)

一方、2025年の新作《生マレル時Ⅰ・Ⅱ》は、より個人的で親密な幻想性を漂わせている。意識的に「幻想」というテーマを念頭に描いたという本作は、竹内自身の言葉にある「形の無いものを刻んでいくとき実存しない何かに触れられる」という体験の視覚化ではないだろうか。何かが生まれる瞬間、それは自然における生命の誕生であっても、人間の心の内に生まれる何かであっても、「無」と「有」のあわいに訪れる奇跡であることには変わりはない。本作品で竹内は、繊細で有機的な形態を柔らかな光の膜で覆い、決定的な瞬間をきわめて幻想的に表現している。

竹内は自らの制作について、自然と人工物の両方から強い影響を受けている、としばしば語っている。彼女の生まれ育った高崎と桐生の両市とも、大自然と人工的な文化のどちらにも豊かに恵まれ、人々は両者に包まれて生を営んでいる。今回の展覧会を鑑賞して、竹内の制作の原点にふたつの故郷の影響が色濃く存在するのではないかと、あらためて感じた。

最後に、本展示の冒頭を占める「『序曲』としてのオノサト・トシノブと新井淳一」のコーナーについて言及したい。オノサト・トシノブ（1912-1986）と新井淳一（1932-2017）は、抽象絵画とテキスタイル・デザインと創作のジャンルはまったく異なるが、いずれも桐生における現代美術の基点となった存在である。

オノサトの展示作品4点のうち3点が1970年代の大型作品である。1950年代から円のモチーフによる求心的な抽象表現を追求していたオノサトは、1970年代に入ると絵画の全体性を強く意識し始め、独自の組成と宇宙をもった生命体のような絵画を生んでいる。一方、1980年代からテキスタイルの分野で驚くべき斬新さを見せていた新井は、ライフワークとなる金属を使ったスリットヤーンで一世を風靡した。「『序曲』としてのオノサト・トシノブと新井淳一」の展示室では、メタリックな光沢を放ちながら柔らかに空中を浮遊する新井の布を透かして、オノサトの色彩に満ちた小宇宙を見ることになる。そこには化学反応のように不思議な幻想性が生まれており、強く心を掴まれる鑑賞体験となった。

（高崎市美術館 学芸員）



「序曲」としてのオノサト・トシノブと新井淳一 展示風景

（表紙、展示風景の写真はすべて撮影：木暮伸也）

## 20世紀アートセレクション展と萬鉄五郎

高橋 峻

萬鉄五郎記念美術館では、企画展「大川美術館コレクション+ Plus 20世紀アートセレクション」（会期：2025年9月20日～11月9日）を開催した。本展は、大川美術館のご協力のもと、初代館長・大川栄二氏が約40年にわたって収集した名品の中から、20世紀に花開いた多彩なアート表現を紹介した。当館で西洋美術の展覧会を開催するのは約20年ぶりということもあり、東北圏を中心に県内外から多くの方にご来館いただいた。ピカソやウォーホルなど、特定の作家を目当てに遠方から訪れた方もいて、その人気の高さをあらためて実感させられた。

展覧会名に「Plus」と付けたのは、メインの出品作である大川美術館の85点のほか、当館所蔵品と石神の丘美術館（岩手町）の柴田コレクションから、同時代の作品を「Plus作品」として加えたからである。当館所蔵品について言えば、西洋美術の作品は、実はこれまで長らく公開機会がなかったもので、大川コレクションと並んで恐縮ながら、20世紀美術の流れの中でご覧いただけたのは幸いであった。

展覧会全体をおおまかに分けると、二部構成となっており、前半は「エコール・ド・パリ」と、キュビズムやシュルレアリスムなどの「アヴァンギャルド」の画家たちを紹介した。やはりピカソ、ローランサン、ユトリロらの油彩画が並ぶコーナーは、華やかさがあって、来館者の目を惹いていたが、ほかにも銅版画やリトグラフ、陶板、彫刻、カラー

ジュなど多彩な表現技法の作品が並び、作家名だけを見ても、その幅の広さには驚かされる。後半の「アメリカン・シーンの画家たち」では、ベン・シャーン作品群がまとまって見られ、こちらもファンに好評であった。彼の一連のシリーズに加え、グアッシュによる大作《ゴエスカス》や、第五福竜丸事件を題材としたラッキー・ドラゴンシリーズの《なぜ?》など、社会に目を向けた作品の数々は、会場の中でも特に印象的だ。さらに、ウォーホルを筆頭としたポップアートや、アメリカに学んだ日本人画家の清水登之、野田英夫、国吉康雄の作品など、多方面を網羅して、20世紀美術を一気に概観するような充実した内容は見る者を飽きさせない。ジャンルの多彩さも然ることながら、その一つ一つに光る画家の個性は、本コレクションの大きな魅力である。



会場風景

また、大川美術館と言えば、松本竣介を中心に岩手に縁の深い作品も多く所蔵されているが、今回、ご厚意により、萬鉄五郎《土沢風景》(1915年頃)を特別出品いただき、常設展の作品とともに紹介した。小高い丘から見下ろした土沢の街並みは、萬が好んで描いた構図でもあり、地元の人々にとっても親しみ深い光景だ。本作が描かれた土沢帰郷期に、萬は中央画壇と距離を置いた故郷の地で、キュビズムの実験を重ね、再上京後、その研鑽の成果を次々に発表している。当時の美術の潮流を追いかけるように作風の変化を見せた萬だが、同じ20世紀の海外作品と照らして見ると、その先進性、同時代性が浮き彫りになってくる。その意味では、企画展鑑賞後の常設展は、いつもよりちょっぴり豪華に、あるいは普段と少し違う見え方で、来館者の目にも映ったのではないだろうか。



萬鉄五郎《土沢風景》1915年頃

\* \* \*

本展開催にあたり、大川美術館の皆さまに多大なるご協力、ご助言をいただきました。末筆ながら、この場をお借りして御礼申し上げます。

(萬鉄五郎記念美術館 学芸員)

#### [企画展]

「桐生のアーティスト 2025  
KIRYU Fantasia — 桐生幻想曲」  
アーティストトーク報告

企画展の会期中、6名の出品作家の方々にご自身の作品についてお話いただく、「アーティストトーク」を開催しました。

#### アーティストトーク 御子貝仁美

日時：2025年10月18日(土) 14:00～14:30

会場：展示室3-2

御子貝仁美氏は桐生市を拠点として、「ADESSO JEWELRY」の名でコスチュームジュエリーの制作を行っています。コスチュームジュエリーとは?、ビーズなどの各種素材や緻密な作業となる制作方法、現在までの制作活動について、コスチュームジュエリーへの思いなどを丁寧にお話いただきました。来場者の方々からのご質問にもわかりやすくお答えくださり、会場は終始和やかな雰囲気でした。



アーティストトーク風景

### アーティストトーク YU TANIMURA

日 時：2025年10月25日(土) 14:00～14:30

会 場：展示室4

YU TANIMURA氏は、アーティスト、デザイナー、イラストレーターとして、分野や制作方法にとらわれない多彩な活動を展開しています。無国籍でどこかノスタルジックな魅力にあふれる作風の秘密や各出品作品にまつわるエピソード、制作方法やタイトルのつけ方、現在取り組んでいることや今後の展望などを楽しくお話していただきました。来場者の方々からは質問だけでなく、「桐生で壁画を描いてほしい！」などのリクエストの声も上がっていました。

### アーティストトーク 福島万里子

日 時：2025年11月8日(土) 14:00～14:30

会 場：展示室5

福島万里子氏は、油彩画を中心とした作品を発表し、昭和会展などで受賞を重ねています。腹の底にイメージや意識を落とし込むことによって作品のコアをつかみ、そこから「におい」や「ヴィジョン」を引き出すように描いていくという独自の制作方法について、熱くお話しくださいました。また、初めての展示となる立体作品、同じ展示室の竹内美絵氏との展示についてもエピソードや感想をお聞かせくださいました。



アーティストトーク風景

### アーティストトーク 竹内美絵

日 時：2025年11月22日(土) 14:00～14:30

会 場：展示室5

竹内美絵氏はモノクロームの絵画を描き、高校時代から独立展に入選や受賞を重ね、注目を集めています。革用の銀ペンを使用した精緻な線について、アトリエ周辺の自然や人工物、聞こえてくる音など、制作の重要なエッセンスとなるものについて丁寧に話しくださいました。また、同じ展示室の福島万里子氏の作品との対比や共通点について、アーティストの視点からわかりやすく解説していただきました。



アーティストトーク風景



アーティストトーク風景

### アーティストトーク 寺村サチコ

日 時：2025年11月29日(土) 14:00～14:30

会 場：吹き抜け

兵庫県出身の寺村サチコ氏は、現在桐生市を拠点とし、絞り染めと型染めの技法を用いて布による立体造形物を制作しています。各出品作品について、染めの技法や素材となるシルクのオーガンジーについて、わかりやすくご説明いただきました。また、階段のある吹き抜けの空間や鑑賞者の動線を生かすように考えられたという今回の展示について、詳しくお話しいただきました。



アーティストトーク風景

### アーティストトーク ヤマザキミノリ

日 時：2025年12月6日(土) 14:00～14:30

会 場：展示室6

ヤマザキミノリ氏は、立方体万華鏡 CUMOS から光のオブジェ、空間演出デザイン、光のインスタレーションまでを一貫して展開するアーティストです。創作活動の出発点であり、現在も制作されている CUMOS、国内外で開催されているワークショップ、そして、ライトアートから空間演出デザインやパブリックアートへの展開について、ご自身で「ほぼ回顧展」とおっしゃるように、これまでの足跡と作品、今後の展望までをわかりやすくお話しくださいました。



アーティストトーク風景

### 展覧会のご案内

#### 没後70年記念

#### 茂田井武「ton paris」とパリの画家たち

2026年1月17日(土)～3月29日(日)

童画家・茂田井武(1908-1956)は、宮沢賢治『セロひきのゴーシュ』(1956年)をはじめ、戦後の児童雑誌の装丁や挿絵を通して“夢”の世界を描いた画家です。その没後70年を記念し、本展では画帖『ton paris』に光をあて、同時代にパリで創作した画家たちの作品とともに、彼らが見た「パリ」をあらためてご覧いただけます。

#### [同時開催]

特集展示：松本竣介 一人のかたち、街のすがた